

# 秋の川に山に集う人々

2003年 AP放流会

十一月上旬、毎年恒例の放流会の朝は曇天で、天気予報も高い降水確率を示していました。早朝から集まる人たちははしかし、そんな事を意に介するでもなく、続々と集合場所へとやって来ます。見ごろを少し過ぎた紅葉も前夜の雨でしっとり濡れて「これはこれでオツですな」などとたわ言を口にしながら。

## まずは

川です。各グループとも申し合わせた通りにそれぞれの年ごとの景色がそれぞれにあるように、今年は今にも雨が落ちてきそうな雲行きと、光量不足で手ぶれになりがちの写真撮影の塩梅が印象深い。

そこでも川辺の人々は遅しく川を駆ける。転ぶ子供、慌てる親、跳ねる稚魚、なんともぎやかです。どうやらこの日集まった人達は水辺に立つと空模様よりも水面（みなも）の様子のほうが気になるようです。



大人も子供も入り交じって放流しました。



流れに泳ぎ出る稚魚を見守ります。

流れに消えていく稚魚を見てみると、なにかしら見飽きません。緩い溜まりにかたまっているヤツもいるし、ほかの魚を追いかけて泳ぎ回るヤツもいます。明らかに狭いエリアに多すぎる数が入ってしまったのですが、春が来るまでにはそれぞれうまく自分の住み家を見つけていることでしょう。

## 次は

山へ向かいました。植樹です。林道を車まで行き詰めた。霧が山の稜線を隠し、かなり肌寒い。それでもいざ穴を掘り始めたら大人も子供も



頑張っって掘っております。

しつかり集中しています。普段経験することのないだけに新鮮なのか？ 大人はまだこの日植えた木が何年後かに大きく育ってついでこの日の植樹のもたらすものにくらぶかの想像がつきませんが、子供はどんなことを考えて穴を掘り木を植えているのでしょうか？

自分の植えた一本の木が将来どれほど自分に関わってくるのか、こないのか？ きつと家に帰るまでには忘れてしまうのかも知れないけれど、大人になってふとこの日植えた木のことを思い出すときがあったら、その意味もまた違ってくるかも知れません。

## お腹が

空きました。体もすつかり冷えてしまったし、温かいランチをいただくことにしましょう。全員がそろって話も盛り上がり、くじ引き大会も予想外の気持ちのたかぶりを見せました。谷あいの一角が年に一度の熱を帯びる時のようです。

今ごろ川はどんな様子でしょうか？ きつと小さなアマゴ達がやはり空腹を満たすべく、慣れないライズを繰り返して、そうはないであろう賑やかなひとときを過ごしている事でしょう。

(十一月九日 芸北町にて)



イベントの締めくくりはやはり「食」です。



植樹の前にいくつかポイントを教わりました。